

埼玉東

頼れるドクター

2021-2022 版

私たちの街の
ドクター

59名

特集1 あなたの健康を守る第一歩
検査・検診に力を
入れているクリニック

特集2 専門性やこまやかな配慮が魅力
院長自慢のドクター・
スタッフがいるクリニック

“みんなのかりつけ医事情”大調査

自律神経を整えて、だるさや疲れ、
イライラから脱却しよう!

悩める親たちの素朴なギモンに
小児科の先生が答えます!

使い分けよう! 病院とクリニック

地域の病院紹介

- ・春日部厚生病院
- ・南部厚生病院
- ・わかさ病院

気になる医療情報を徹底取材

アレルギー性鼻炎の治療、難聴の治療、
関節リウマチ、大腸内視鏡検査、
マイクロスコープを用いた根管治療

検査・治療レポート

Doctors File

ドクターズ・ファイル
ドクターズ・ファイル 特別編集

ドクターがいてわたしがいる

自分や家族の健康のことを何でも相談できて、いつだって大きな安心感を与えてくれる、
かかりつけ医=「iDoctors」。今号で表紙を飾ってくれたファミリーにも、
そんな特別なドクターがいます。そこには、どんな出会いの物語があるのでしょうか。

取材・文／編集部 撮影／藤記美帆 デザイン／遠藤紅(Concent,Inc.)



妊娠しても働きたい気持ちを
理解してサポートしてくれた

廣瀬ファミリー

Meets

石川病院
石川博臣 院長

PROFILE

廣瀬恵美さん（31歳）と令翔（れいと）くん（1歳）、ご主人の3人家族。廣瀬さんは高校時代のテニス部での経験や学びを伝えようと体育教師に。石川病院には今後、婦人科のかかりつけとしてもお世話になりたいそう。

PROFILE

日本医科大学産婦人科学教室を経て2001年12月から現職。「思春期、妊娠・出産・産褥期、更年期、老年期まで一生のパートナーに」と産科・婦人科で多くの女性に寄り添う。「些細なことでも気持ちを大切に」がモットー。



”
一番大切なのは妊婦さんの気持ち。
仕事や生活も含めて不安を取り除き
何ができるかを一緒に考えて
希望をかなえてあげたい

石川院長



“

命を授かった喜びは、何物にも代え難い。近い未来に腕に抱くわが子と家族の幸せな姿を思うと、心にぼっと明かりがともるような、温かな優しさで胸がいっぱいになる。しかし、喜ばしいはずの瞬間でさえ、働く女性には「ある不安」がつきまとう。

「今の仕事を続けながら、産んで育てられるかな」高校教師である廣瀬恵美さんも、妊娠がわかって、まず「仕事と両立できるか」が気にかかったという。ましてや、廣瀬さんの担当教科は体育。その上、テニス部の顧問とコーチを兼任する文字どおり「体が資本」の職業だ。デスクワークに比べて激しく運動するので、なおのこと心配が募った。

「身重でどこまで動いて平気なのか、それを自分で判断できないことが、とにかく不安でした。生徒に手本を見せるのはいつまでできる？ ラリーをしなればコートに立つてもいい？ 次から次へと疑問が湧いてきて……」

だからといって、授業や部活のすべてを諦めることはしたくないと感じていた廣瀬さん。もちろんおなかの子も大切だが、一度受け持った生徒にきちんと関わっていききたいという思いも強かった。

そんな彼女の悩みと葛藤を受け止めたのが、妊娠初期から通い始めた『石川病院』の石川博臣院長だ。石川院長は、廣瀬さんができる限り体を動かし、今までどおり生徒の近くにいたいと望んだ気持ちを、決して否定しなかった。「妊婦なら控えて当然」と言われるかもと恐る恐るした相談に対しても、その時々の妊娠状態や、運動強度・危険性などを鑑み

” 体育の授業や部活での指導を
妊娠中でも頑張れると思えたのは
細かすぎるくらい私の相談に
丁寧に答えてくれたおかげです

廣瀬さん

“



た上で、「ここまでならOK」と細かく範囲を示してくれた。「仕事や生活の話も含め、広く妊婦さんの言葉に耳を傾け、なるべくご本人の意向に沿う形を模索することが、良い出産やその後の幸せにつながると思います」と石川院長はほほ笑む。

どんな形でなら授業や部活を続けられるかを一緒に考える中で、時にはドクターストップがかかったことも。残念ながら、部活でラケットを握ることは早々に禁止された。

「テニスを続けたいよね。わかるけど、ボールがおなかに当たると危ないから、許可できません」

物腰がやわらかく、穏やかな口調で話すが、医師として言うべきことは言う石川院長の姿勢について、廣瀬さんは「優しくも厳しいお父さんみたくでした」と顔をほころばせる。家族のように親身になって考えてくれたと感じたからこそ、「駄目」と言われたことは必ず守ったそうだ。石川院長と信頼関係を築けたことで、妊娠初期の「どこまで仕事ができるだろう」という漠然とした不安は、いつしか「妊娠中でも頑張れる」という自信に変わった。

「人との関わりを大切に、相手ときちんと向き合うこと。それが私の信条で、生徒と話するときもそう接したいと心がけてきましたね。だから私が誰かに頼るなら、同じように考える人が良かったんです。令翔を産む時に応えてくれたのは、石川院長でした」

教師と生徒も、医師と妊婦も、人と人だ。心が通じるかかりつけ医がいれば、妊娠・出産の戸惑いの中でも道に迷わず前を向き、歩いて行けるのだろうか。